

オランダイチゴに接吻　マリヤ・ヴァルデンガ（訳・村野 克明）

何のために生きているのかを知ること、これは人間にとって大変重要なことである。いずれにせよ、私には重大なことなのだ。

初めて提示された実存的問題、それが私の前に立ち上がるのは五歳の頃、ママに連れて行かれた美術館の絵画サークルでのこと。サークル指導者の女性は私たちを有名な「薔薇色の階段」の段々に座らせ、足元の表面の大理石の模様をじいっと見つめるように命ずる。

「さあ、誰が、何を、見て取れるかしら、興味しんしん、しいんよね」と、彼女は説明を始める。

「私はもう長いこと、ここで教えてきたので、知ってるんだけど、足元の模様をどう見るか、ってことで、あなたたちの未来が決まることが、よくあるのよ」。

子供たちは各自、床を凝視する。薔薇色の大理石はまるごと冒険の舞台である。なぜなら、いろんな色の斑点と白い筋が一面をおおっており、実際に、子供の想像力によって異常な空間を開示しているからだ。

「ゾウの子供だい！」と、どこかの男の子が叫ぶ。

「おりこおおさん！」と、ニーナ・ニコラーエヴナ「サークルの指導者の名と父称。略称NN」が応ずる。

「大人になったら動物学者になるチャンスがあるわよ。それとも獣医さんかしら」

「お下げの人形でええす！」どこかの瘦せぎすの女の子が嬉しうに、のたまう。

「そのとおおり。将来、子だくさんのママになる女の子って、みんなそう言うのよ」とNNは結論づける。さらに、謎解きに答える声を立て続けに響く。

「ひこううき！　きい！（木）、もりい！（森）、ぐのおおむ！（地の精）」

私はといえば、恐怖に囚われたまま、果てもない薔薇色の大理石に見入っている。何か、ほんの少しでもいいから、私の知っているオブジェがありはしないか、そのプロフィールが掴めないものか、と奮闘する。だが、雲に覆われた空のほかには、何もありません。

「バラ色の、そおら」おずおずと、私は、そう発する。

「アツハハハ、あなた、一生、バラ色のメガネ、かけることになるわよ！」ニーナ・ニコラーエヴナは笑い出してそう言う。ただし、

「もちろん、冗談だけどね」と付け足す。

「わるいことなの？」と私は質問する。

「はて、なんと言ったらいいかなあ」とNNは謎めいた調子で応ずる。

「こうしたことが意味するのは、人間って、いつも、ありのままの姿よりも、ずうつとマシに人生を眺めるものである、であるから

して、自分が人生の道を選択する時が来たら、とくに注意深く対処しなければならぬ、ということなのよ」

その後、しばしばこの言葉を思い出すことになる。「選択する」、ということが、私には、人生で一番むつかしかったから。それも、おそらく、私が極度の臆病者だったからだろう。「冒険にチャレンジ」という語結合は、私にあつては、「完璧な呆然自失」以外の何物でもない。私は、いつもカチカチになってしまう、石造りの偶像みたいに。

「ゴールカ〔街中に設置された櫓やスキー用の大きな滑降台〕から滑って降りるのさえ怖いんじゃない、この先、どうやって生きていけるのか」と、パパは憤慨する。

ああ、これは悲しき真実である。幼年時代の私は、蝶々と蛇、暗い所と高い所とが怖くて仕方ない。パパは見事な児童詩を書く人で、この問題をめぐっても詩作をものにするのだが、その中で、女主人公の幼いマーシエンカに対して様々な娯楽が勧められる、森林、スケート、手ざり、筏（いかだ）とか。ところが、臆病なマーシエンカは全面拒否の姿勢を貫き、どんな提案にも同じ返事を繰り返すばかり。いわく、

「もしも、おっこちたらどうしよう？ 水に沈んじゃったら？ 体がバラバラになっちゃったら、どうなるの？」

ああ、この点にこそ、わが苦き真実のすべてが存する。私がびくつくのは、蛇と蝶々ばかりでも、暗い所と高い所とばかりでもない。

耳をつんざく響き、大きな魚、地理の教師、クラゲ、も怖い。さらに肝心なことに、戦争、が怖い。

戦争は、子供の私に、何か非常に身近なものに思われる。ピオネールの英雄たちが発火用混合液の入った瓶を手にして戦車に向かって勇敢に突進した、という話を学校で聞いて、私は号泣する。そうした状況の中に置かれた自分自身を生き生きと想像することができたから。クラツカーの弾ける音にも飛び上がったし、まうほどの私がある。ピオネール・キャンプでは、ドイツ軍の列車をパルチザンが爆破するという映画を見たが、それ以来、私は、大人になるまで、列車内では一睡もできない始末。

医者は心配顔のママにこう説明する、娘さんは過剰に発達した想像力に苦しんでいる、これでは実際に恐怖に打ち克つことは不可能である、残された希望は、娘さんがもっと成長してこうした状況が自然に解消されることだけである、と。結局、この見立ては間違っていない、と判明する。なぜなら、私たちに向かって直進してくる戦車をペプシコーラの瓶でもって爆破せよ、と、指揮官が私に攻撃命令を下し、私が恐怖に囚われる、というパターンは解消されたから。核戦争への恐怖によって、だが。

そんなわけで、少なくとも、私は孤独にはならない。というのも、私の知り合いの子供たちのすべてが、来るべき核戦争を絶対的に恐れているから。よって、空爆への恐怖は、ラジオから発せられる正確な時を知らせるシグナルへの臆病な期待に取って代わる。なぜな

ら、その信号音は「避難せよ」という号令を思い出させるから。夜ごと、私は救急車のサイレンの音に目を覚まされ、パニックになってお婆さんに聞きたです、

「どこの防空壕へ避難したらいいの？」

物理学者であるパパの皮肉っぽい論拠は、こうである。

「核戦争を恐れるなんてナンセンスだ、いざとなれば、我々全員あつという間にいなくなってしまうからだ」

だが、この言いぐさは私をちっとも落ち着かせない。さらなる恐怖が私を虜にする。「知ることができない」ことへの恐怖、である。原子爆弾の爆発が私たちすべてを包んだとき、さて、私たちはどこへ消えてしまうのか、ということである。

お婆さんの説明では、善人は天国へ行く、天国は果てしなく大きい、という。したがって、その「果てしなさ」に私は恐怖を覚え出す。今度は、夜、ベッドの私は、頑固に、どこにも終わりのない空間を想像することに精を出す。

こうした思考経路について、一般的にそれがしばらくでも考察の対象となったことがあるかどうか、は知らないが、私があえて請け合うことができるのは、それこそ最も人を怖がらせる考察の一つであり、そこでは想像力に耽るしかない、ということだ。宇宙の空虚への凍えるような恐怖、これは比較を絶する。この恐怖感を絶つために、私は、至高の世界の唯一の、仮想的な住人と毎朝、挨拶することを思い付く。

だが、この挨拶はあまりうまくはいかない。

「おはよう、神ちゃま。おはよかみちゃま、おはかみちゃまああ！」と三度、朝、私は、知られざる何者かに唱える。

「あなたは、そこにいるの？ 私、あなたの言うこと、聞くわ」

「こんばんは、神ちゃま。こんばんかみちゃま、こんばかみちゃまああ！」と、寝る前に私はささやく。

「あなたに、私が、見えるかしら。私、知りたいの、私たち人間は、地上にごっそり住んでるのに、どうして、私がここにるのが、あなたには、わかるのかしら。私、知りたいの、あなたにとって、人間って、私たちにとってのゴキブリくらいの大きさなのか、それとももっとでっかいのか、私、知りたいの」

私は、ゴキブリに対する残酷な処遇ゆえに、神が私たちに復讐するのではないか、とひどく気にかかってならない。ママが定期的なアパートの中でゴキブリに毒を盛っているからだ。パパはと言えば、私の関心を他の話題に転じさせるべく骨を折る。「神にとっては、もちろん神が存在するならばの話だが、ゴキブリも微生物も同じなさ」と。

「何も気にしなくなっちゃっていいんだよ、僕たちは毎秒、数百万の微生物を押しつぶしてるんだからね」と、パパは私を説得しようとする。

ああ、この論拠は私に悲しく作用する。微生物への蔑視に、私は、来るべき神の不平不満の直接原因を見て取る。それゆえ、画家同盟付属のピオネールキャンプでの、七月の或る日の、地上への太陽の墜落、という出来事に、私は何の疑いも挟まない。すべては明らか

だから。ゴキブリへの私たちの処遇ゆえに、神が、むかつ腹を立てて、制裁、すなわち、第三次世界大戦を始めたのである。

あなたたちはもちろん信じないだろう、太陽の墜落を私が見た、ということ。だけど、本当のことである。

七月、タルーサ市のオカ河岸でのこと。雨は通り過ぎて行つたばかり、木々の葉はまだ濡れていて、雲間から太陽がすでに姿を見せている。清潔なタオルを持って、私は自分の泊つてる棟から飛び出す。喜んで、湿った木々の濃密な匂いを胸に吸い込む。と、奇妙な、小さな破裂音が聞こえる。まるで、見えない溶接工がどこかすぐ近くで、見えないパイプのハンダ付けを始めたかのように。トルルル、シュシュシュシュ、トルルル、シュシュシュ……。

この響きはどこから？ 私は振り返る。すると、木々の間に沈む太陽が見える。まぶしく、理想的な丸形で、重たいシャボン玉に似たそれは、揺らめき、小さな破裂音を立て、二本の電柱の間で滑らかに動く。トルルル、シュシュシュシュ、トルルル、シュシュシュ、ブームス！ と、電柱に衝突し、地上へと重たい黄金色の滴（しずく）を落とす。あとは草っ原の円い焼け跡が残るばかり。そしてそれは電柱から離れる。

心を奪われたまま、炎のアトラクションを私は凝視する。この光景から目が離せない。太陽をじっと見ることができるとは！ 思いがけない話、である。まじかに寄つても、日差しは暖かくない。冷たく、背筋がぞつとするようだ。何だか、燃える毒クラゲといった

感じ。トルルル、シュシュシュシュ、ブームス！ 輝いていて無頓着なそれは、順番に、木々の葉とか幹とかを照らす。電柱に衝突すると滴（しずく）を落として縮小する。と、すぐさま理想的な丸い形を取り戻す。そして電線に沿って逆行する。

心を奪われた私は、より近づく。この光景のすべてに、何か限界を超えたもの、宇宙的なものが存する。まるで、遂には、未知の神が、「空虚は存在しない」と私に対して証明しようとしたかのように。荒々しくも素晴らしい太陽は、私の知る限界の向こう側のすべてを高尚で比類なきハーモニーで充たす、と、そう告げる。だが、この調和の世界は、小さき人間としての私には不可解だ。未知の空虚の中、神によって創られた天体は、同じく沈着かつ厳肅に、円運動をする。この循環運動の意味を知るのには神のみ。おそらく、「無限」もこう見えるだろう、神が私たちを眺めるその場所から、だが。

「爆弾だぞ、馬鹿、早く伏せる！」と、どこかのピオネール指導員の驚天動地の叫び声がある。私は地面に伏せる。当たり前の仕草だ、なんせ原子爆弾なんだから。私たちが皆がずいぶん長らく待ち望んだことが今、到来したのだ。馬鹿な私は察しがわるかっただけだ。トルルル、プシュシュシュウウウ！ トルルル、プシュシュシュウウウ！ ああ、もちろん、まさにこれこそ原爆の姿、原爆の響きなのだ。

「子供たち！ みんな地面に伏せろ、動いちゃ駄目だぞ！」と、体育指導員が誰それに向かい大声を上げる。

草むらに飛び込んで、私は目をつむる。鼻の先をクローバーの馴

染みの匂いが襲撃する。飢えたるピオネール員の甘美な慰め手とはこのこと。トルルル、プシユシユシユ、トルルル、プシユシユ……闇の中、唸（まぶた）をつむったままの私、そして、警鐘のように軋り続ける盲目的な冷たい太陽。

もしもこれが原子爆弾であるならば、と私は思う、これが地上での私の最後の瞬間なのだ。目をつむってる場合じゃない！ 私は目を開ける。すぐ眼前に、大きな、絵葉書から飛び出したような美しいオランダイチゴ。二枚のビロードのぎざぎざの葉っぱと、明るく重たげな熟したイチゴの実。なんてきれいなのだろう、と私は感嘆する。何という完璧さか！ どうして以前の私は気がつかなかったのだろうか。

トルルル、プシユシユシユ……瞬きもせずに、執拗にオランダイチゴを見つめる私。永遠に記憶に刻み付けようと努める。

「子供たち、起き上がっちゃ駄目だぞ！」と、ピオネール指導者が命じ、脇の方の誰かに向かって叫ぶ。

「馬鹿、馬鹿、早く電源を切るんだよ！」

私は、目を離さずに、イチゴの実に魅せられる。最終的に恐ろしい空虚へとわが身が消え失せる以前に、出来る限り詳細に、その姿を記憶にとどめようとする。私には、はっきりとわかる、これが、地上で私が見る最後のモノだ、と。トルルル、シユシユシユ……太陽はわが頭上を動き続ける、たぶん、もうすぐ爆発だ……。シユシユシユシユ、トゥーク！シユシユシユ……なんでこんなに長く続いているのか？

トルルル、シユシユシユシユ……もうオシマイだ。原子爆弾に救いはない。誰も私たちを助けることができない。神の憐れみがない限りは。もしも、神にとって、私たちの巨大な地球が、私にとってのイチゴの実と同じように、小さくて、美しいものであるならば。

今生の別れに私は綺麗なイチゴの実を眺める。そして、それに接吻をして、目をつむる。

「神様、オランダイチゴをお守りください。恐ろしい太陽を元へと連れ戻してください。そうして下されば、私はあなたのオランダイチゴを忘れないでしょう」

トルルル、シユシユシユシユ……闇の中、無慈悲な破裂音の響く中、とくに感じられる、草草よりも強烈なオランダイチゴの匂い。草草は失望の匂い、オランダイチゴは希望の匂いを発する。

トルル、シユシユシユ……トルル、シユシユシユ……私は目を開けない、闇の中で横たわっている、だが、もう怖くはない。神よ、あなたが救いの手を差し伸べてくださらなくとも、私はともかくもオランダイチゴを記憶にとどめるでしょう。オランダイチゴという言葉は「地球」から来ています「オランダイチゴはロシア語では *Землянка* だが *Земля* は地球を意味する」。地球の守り手はアトラスです。彼には、非常に大切な重荷「地球」を落つことす権利はありません、私とその邪魔をします、これは約束です、私が地球の破壊をくい止めます、記憶にとどめます、守りきります。ただ、私たちすべてをお救いください、神よ。

「おいおい、小さな歌い手さん、いつまでおねねしてるんだ、さあ起床だよ」

私はしゃがみ込んで、どうにか瞼（まぶた）をこじ開けようとす。呆然としたままの子供たちはすでにベランダに集合している。その床の上を行ったり来たりする体育指導員。ピオネール指導員たちは、お互いの手元から瓶をひったくっては、いらいらした感じで水を飲んでる。

「三百人だぞ、子供が」と、ピオネール団長が繰り返す。ぶるぶると震える手をポケットの中に隠しながら。

「三百人だぞ。あいつに襲われなくてよかった。おお、こわっ！」
私は草むらに座ったまま、起き上がることができない。

「起きなさい、さあ」と、ピオネール指導者が私の肩を引っ張り上げる。

「あれは球電光だったんだよ。万事オーケーだ。誰一人ケガもしてない。さあ、起きなさい」

私は、しゃがみこんだまま動かない。

「うーん、調子でもわるいのかい」と、私の顔を覗き見ながら、大声を出すピオネール指導者。

「ぼくの顔がわかるかい？ ねえ、言うこと聞いてくれよ」

私はどうしても口が動かない。押し黙ったまま立ち上がる。そして、自分の泊っている棟に向かう。

「彼女、ショックが抜けてないね」と、私の背後から声が聞こえる。

いや、ショックなんかじゃない。と私は独り言で応ずる。そんな程度のものではない、もっと、ずっと強いものだ。私はこの世界に接吻したのだ。おかげで、草は苦く、オランダイチゴは甘く、太陽はまるい、と知ったのだ。私はこの世界にたった今、接吻したばかりなのだ。（了）

【補記】

- 原題……〈Полетный земляник〉『オランダイチゴに接吻』（原文ロシア語）。
- 出典・著者……ウエブ版『水源地』第二号（二〇二〇年九月一日発行）所収の『アゴーヴナ』（拙訳）と同じ著者。出典も同様。同号の「補記」を参照。
- 「薔薇色の階段」（Розовая лестница）……「有名な」と形容されているが、この美術館が不詳。ロシア側のネットで検索したが、意外に、それらしき「階段」が出てこない。
- 「画家同盟付属のピオネールキャンプ」……「ピオネール」とは「ソ連邦における十歳から十五歳までの少年少女を対象とする児童組織」（平凡社版『ロシア・ソ連を知る事典』）。本編冒頭の「私」は「五歳の頃」の女の子だが、後半部のピオネールキャンプ参加の「私」は「十歳から十五歳までの」少女。「画家同盟付属」とあるので画家の息子・娘がキャンプ参加の優先権があるが、「私」の「父」は「物理学者」である。冒頭部分の印象では「ママ」は画家なのかもしれない。なお、訳者としては、ピオネールキャンプ参加時のこの少女の年齢を「十歳」位と想定して訳筆を進めた。
- 「球電光」（Шаровая молния）……ウイキペディアの「球電」の項では「大気中を帯電し発光する球体が浮遊する物理現象、あるいは、その球体そのものを指す」。

（二〇二三年七月二十六日、攔筆）